

て仕舞つた。そして死せる偉大さは、輕微にして卑俗なるものとの關係が切れて仕舞つた時に、一層偉大に見えるものである。そしてわれらは、それを、偉大な教育がわれらのために創造する反射された・そして醇化された光のうちに於てのみ、初めて見る事が出来るのである。われらはこの理想を、近代生活の浮華な・混亂した光のうちに引きおろす事が出来るであらうか？

相衝突する要求を、多くの悲哀によつて掻き亂されて紛糾錯綜せる利害關係と、經驗を甚しく混亂させる多くの先入見とを有する近代世界のうちに生れたるわれらに取つては、自己自身と快活且靜平に一致するといふ問題は、古代生活の簡單なる状態のうちにあつた希臘の人々よりも、たしかに、すつと困難である。然し、知は以前とほとんど同様に、完全な事と中心ある事とを要求する。十八世紀に於ける取り亂れた・不安定な獨逸(の海岸)に打ち寄せられた希臘藝術の破片そのものゝやうに、ヴァンケルマンはこの性質を、その最も原初的な・また最單純な形に於て、夙にゲエテの想像の上に印銘したのであつた。ヴァン

ケルマンに於ては、この典型が書物に於けるやうに、或は理論に於ける如くに現はれて來るのではなくて、それが激情的な生活のうちに、また一個の人格のうちに現はれて來るのであるから、遙かに執拗である。一切の近代的な關心を有し、近代の思想の混迷せる潮流のうちに没入すべき傾きを有せるゲエテのために、ヴァンケルマンこそは、最明確なる輪廓に於て、文化の永遠なる問題を解説する人であつた。即ち權衡、自己自身との一致、完全なる希臘的の塑造がそれである。

この問題は、フライニが裸形で水中から現はれて來るやうに、肉體の形の完成や、外界とのよろこばしい協和によつて、解決されることは出来なかつた。そうするには、蔭はあまりに長く伸びて、光はあまりに莊嚴になつて居た。それはまた、ペリクレスまたはフィディアス(希臘の最有名なる彫刻家、紀元前約五百年前)に於けるやうに、或一つの才能の直接なる行使によつても、解決されることが出来なかつた。われらの近代的な知的生活の多種多様な要求の眞中にあつては、それは只纖弱にして一面的な生長に終つて仕舞ふかも知

れなかつた。ゲエテのヘレニズム(希臘主義)は、これとは異つた階級に屬して居た。それは、注意深い・急迫せる智性の普遍と快活、完全と清澄とであつた。『全と善と真とに於て確乎として生活する』といふのが、ゲエテが自己自身のより高い生活に對する敘述である。そして『全に生きる』(im Ganzen leben)とは、抑いかなる意味であらうか？ それは、以前には貴重であつたものが、無關心のものとなつた事の、幾度もあつた人の生活を意味するのである。文化の生活を企圖する人々には、或特別の才能の發達——その強烈にして、努力を経た又一面的な發達——から生ずる文化の諸相が、逢遭するものである。これらの諸相は、世界が示すべく所有せる最もかがやかしい熱誠(のあらはれ)である。而して甲又は乙なる天才の異なる形が、彼等に對してなす要求の輕重大小を衡るのは、彼等の司るところではない。自己修養の純粹なる才能は、天才のこれらの種々の形式が與へ得るすべてのものを、刈り取るといふことよりも、これらの諸形式のうちにて、本能それ自らの力を見出すといふことに、より多くの注意を拂ふのである。智の要求は、それ自らの生けること

を感ずるに在る。それは文化のあらゆる差別ある形式の規則、活動及び知的報酬を洞觀しなければならぬ。然しながら、これは單に、自己自身と文化の諸形式との間の關係を計る事に過ぎない。智は、生の最高なる藝術的見解によつて、これらの諸形式の各から、その祕密が得られ、かくして各の形式を、その居るべき場所に引戻すまで、あらゆる形式と争闘するのである。斯くの如き性質は、一種の情熱的な冷靜を以て、以前の自我から脱出することを喜ぶ。而して特に彼等は、事實上彼等の能力を制限する或特殊の天賦に、専ら自らを委ねないやうに注意して居る。官能的な天賦を有するゲエテにとつては、この性質をして彼自身を統御せしめるやうにするのは、容易であつたらう。『この世ならぬ』性質を有する或人たちに取つては、『ウィルヘルム・マイステル』(ゲエテ作の長篇小説——譯者)に於ける溫良なる敬虔の念の理想たる『美しい魂』であることさへ、容易でありまた自然である。しかしゲエテの偉大なる見方から云ふと、これは人間が普く自己の周圍に感じて、そしてこれを自己の背後に残す生の一形相であるやうに見えたのである。また、凡庸なる形而上的本能

に惑溺するのも容易ではある。然し形而上學に對する趣味は、若しわれらにして、われらの生涯を藝術的完成の形にしやうとするなら、放棄しなければならぬ事項の一つである。哲學が教養に資する所以は、絶對的の・または過境的知識を賦與されたと空想されるやうなものに上るからではなくて、それは、生の激情と奇異と戯曲的對照とを發見すべくわれらを助ける諸々の問題を暗示するからである。

然し、ゲエテの教養は、『覆面のうしろ』に止まつては居なかつた。それはいつも、眞の創作、藝術の實際的の働きのうちに現はれた。彼にとつては、問題は、『古代的理想の快活と普遍性』とが、近代世界の經驗の充實を包含させらるべき藝術的作品に與へられ得るか』といふ事になつた。われらは既に、藝術の諸種の形式の發達は、人間が人性に對する思考の展開に相應し、心がそれ自らに對して漸次に増加して示現し來ることに相應せる事を見た。彫刻は、希臘の人性主義の迷はざる・力強い輪廓に一致し、繪畫は、中世期の神祕的深遠と錯綜とに照應し、音樂と詩歌とは、近代世界に於て榮える。

われらは、詩といふ言葉で、その形によりて、——その實質とは異つたものとしての形によつて、——われらに快感を與へる力を有する一切の文學的作品を總括しやうと思ふ。只この變化ある文學的形式に於てのみ、藝術は、藝術をして近代生活の諸状態を取扱ふべく可能ならしむるところの廣い・變化多き・微妙なる手段を左右し得るのである。教養のため近代藝術がなさねばならぬ事は、近代生活がわれらの心靈を満足せしめ得るやうに、この生活の細項の排列を改め、この生活を藝術のうちに反映せしむるに在る。そして近代生活を前にして、精神は何を要求するであらうか？ それは自由の心を要求する。而して彼は、人間の意志が、若し苟も制局されるならば、それはたと彼の意志よりも、もつと強い意志によつてであると想像する。素朴にして粗野なる自由觀を、決して再び懐くことは出來ないのである。藝術に於て、この自由觀をあらはさうとする企ては、この自由觀が淺薄で、無興味だと思はれるであらう位に、今日では内的眞實性に缺如してゐるであらう。近代精神が自らに就いての考へ方のなかに於ける主なる要素は、自然律の複雑性でまたその普遍

性である。道徳的秩序に於てすらさうである。われらに取つては、必然と云ふ事は、古代に於けるとは異つて、最早われらの外にあつて、われらがこれと戦ひ得る神話的人物の一種ではない。必然はむしろ、われらを縦横に貫いて編まれたる魔法的の網である。それは、近代科學の物語る・夫の磁力的組織の如く、一個の網細工を以て、われらを貫通するのである。その糸は、われらの神經のうちで、最微細なものよりも微細であるが、それでもそのうちに世界の中心的勢力を包蔵するところのものである。藝術は、これらの紛糾せる網のうちに於ける男女を描き、精神に與ふるのに、少くとも自由の心と同様のものを以てすることが出来るのであらうか？ われらは確かに、ゲーテの小説に於いて、及びそれ以上、ヴィクトル・ユウゴオの小説のうちに於て、かくの如くに、近代生活を取扱へる近代藝術の高い價値の例證を持つのである。そこでは、近代生活は近代精神がさう考へねばならぬやうに考へられては居るが、それでもこの生活の上に、快活と安靜とが反射させられて居る。自然の法則は、それがいかにわれらを適ましても、われらはこれを變更すること

は、決して出来ない。然しわれらが、この法則の宿命的の聯關に注目する態度には二つあつて、比較的高尙なるものと、比較的高尙ならざるものとがそれである。そしてなほ注目すべき大事な或ものは、この態度そのものにある。ゲーテやユウゴオの小説、または彼等の後に生じたる或すぐれたる作のうちには、上述の法則の紛糾が、その法則の網が、悲劇的狀態となり、そのうちで高尙なる男女の群れが、自ら求めて極度の破裂を招致して居る。若し人あつて、これらすべてを通覽したならば、畢竟は人間にこれらの偉大なる經驗を與ふる境遇の連鎖に對して、誰れが憤激するであらうか？

——千八百六十七年——

結

論

ヘラクリートは曰ふ。萬物は流轉して常住することなし。

あらゆる事物及び事物の法則を、恒なき様象または形象だと考へることは、漸次に、近代思想の傾向となつた。われらはまづ、外部的なるもの——即ち肉體生活から初めやう。これをそのより微妙な合ひ間の一つに於て、例へば、夏の暑い時に、溢るゝ水のなかゝら快くとび上つた瞬間に於て、考へ見よう。此瞬間に於ける肉體的な生活の全部は、科學がそれに名稱を與へる諸種の自然元素の結合でなければ何であらうか？ 然し、これらの元素、即ち、燐と石灰と、及び微細な纖維とは、單に人體に現はれて居るばかりではない。われらは人體から非常に離れた場所に於て、此等を發見するのである。われらの肉體生活なるものは、これらのものゝ永遠の運動であつて、——例へば、血液の循環とか、眼の水晶體の消耗と補充、あらゆる光線と音響との下に於ける頭腦組織の變化などがそれである。——要するに科學がそれを、より簡單にして、より根源的な力に還元する過程である。われらを組成する元素の如く、これらの力の働きは、われらの外にも擴がつて居る。それは鐵を

錆びさせ、穀物を實らせる。われらのあらゆる側に於て、ずつと離れたところまで、これらの元素は、多くの流れをなして押し出され、廣く散布されてゐる。而して生誕や、身振りや、死去や、墳墓から莖の生ずることや、これは實に幾千萬の合成的結合のなかからの僅かなものに過ぎないのである。顔面と四肢との明瞭にして恒久な輪廓は、われらの一個の形象に過ぎない。われらは、この形象のもとに、それらの結合を集めるのである。——例へば、一枚の織物のなかに在る一つの模様の様子の如きもので、その本當の絲は、この模様を越えて行つて消えるのである。少くともわれらには、かうした火焰的な或ものが在る。即ち生命は瞬間から瞬間へと、常に自らを新たにして行く力の集合であつて、この集合した力は、遅かれ・早かれ、再びその進行中に於て、互に別れるのである。

或は、若しわれらが、思想と感情との内界を考察し始めると、その渦卷は、なほ更ら速かに、その焔はいよいよ猛烈で、ますます貪食的である。内界に於ては最早、眼が漸次に暗くなつて來たり、壁面から色彩が漸次にうすれ行くやうなことはない。——そこに

はまた、岸邊で見るやうに、表ては静かだけれど、實は水が下の方で流れて居るやうな運動はない。そこにあるのは、中流の急速な流れであり、觀察と激情と思想との瞬間的の働きの流れである。初め見たときには、經驗はわれらを壓伏するに、鋭い而して煩はしい現實を以てし、行爲の幾千の形式によつて、われらをわれらの外に呼び出し、外界の物象の洪水の下に、われらを埋め去るやうに思はれる。然しながら、省察がこれらの物象のうへに働き初める時は、これらの事物は、その影響の下に消失する。魔法の或巧技を受けたかのやうに、物象の糊着力は一時中絶された如くに見え、各々の對象は、觀者の心裡に於て、印象の一團に——即ち色と匂ひと質とに——分解される。而して若しも、われらが思想のうちで、この世界を熟考し續けるならば、——言語が包むやうな堅い性質の物體世界ではなく、不定で・搖動し・自家撞着する印象の世界を熟考し續けるならば、——これらの物象についてのわれらの意識と共に燃え共に消ゆる印象の世界を熟考し續けるならば——それはなほ更ら收縮して、觀察の全範圍は、個人的の精神の狭い室に縮小される。既に印象の

一團に還元された經驗は、個性といふ厚い壁によつて、われらの一人一人に對して固まられて居る。この壁を通じては、いかなる眞實の聲もこれまで通り來ることなく、またわれらから、われらが外界にありと只想像し得るだけのものまで届くことは出來ない。これらの印象の各々は、孤立せる個性の印象である。各の精神は、孤居せる囚人として、或世界について、それ自らの夢想を保つて居る。分析は更に一步を進める。そして個々の精神の印象は——われらに取りては、經驗が印象になるのであるが、——いつも遁走せんとしつゝあるものであることや、印象の各々は時によつて制限されてあること、また時は無限に分ち得べきものであることと同じく、印象の各々はまた無限に分ち得べきものたることを、この分析がわれらに保證する。印象に於て眞實なるすべてのものは、ほんの一瞬間であるからして、われらがこの印象を理解すべく試みる間に消失する。印象については、それが存在するといふよりも、むしろ存在することをやめたと云つた方が、いつもより多く眞實であらう。(暗い)流れの上で、いつも新らしく燃え上る・ゆらめく鬼火に——自らのうちに

存在を認めることなく、彼等の賦才のか、やかしいことの中に、力が進み行きながら悲劇的に分解される姿を見ざる事は、霜と日光との此短い日（人生を冬の寒冷な日にた）に於て、夕暮ならぬうちに既に眠りに就くと同じ譯である。われらの経験の華やかなことに就ての意識と、その驚くべきほどに短い事に就ての意識とを有しつゝ、見やうとする。また觸れやうとする一個の死物狂ひな努力のうちに、全力を傾注するならば、われらは見たり。觸れたりする事物に就て、理論を造るだけの暇を持つことはほとんどあるまい。われらがなさねばならぬことは、いつも好奇的に、新しい意見を檢査し、新しい印象を得やうと努めることであつて、コムト、ヘゲル或はわれら自身の容易い正統哲學で納得しない事にある。批評の道具としての、または見方としての、哲學的理論或は觀念は、さもなくば、注意を受けずにわれらのほとりを通過し去るべきものを、われらが拾ひ上げる事に助力するものである。『哲學は思想の顯微鏡である。』この経験の或部分を、われらがそのうちに入るを得ざる利害關係のために、或はわれらがそれに同意しなかつた或抽象的理論の

ために、または單に便誼的なことのために、犠牲にすることをわれらに要求する理論や、思想や、學說やは、われらの心を捉ふべき何等の本當の權利をも持たないのである。

ルソオの著作のうちで、最も美しい個所の一つは、『懺悔』の第六卷に於て、彼が彼の心のうちに、文學的意識の覺醒したことを敘するあたりである。死のほんやりした班點が、いつも彼につきまといつて居て、彼は若い時代に於て不治の疾に襲はるゝことを信じた。そこで彼は、残れる合ひ間を、出来るだけ多く利用するには、いかにせばよいかと云ふことを自問した。彼は、それが知的昂奮によつてでなければならぬと決定したときに、その去の生活に於ける何ものによつても煩はせられることがなかつた。彼は實に、この知過的昂奮を、この時丁度、明瞭激刺たるヴォルテールの著作に於て見出したのである。ヴォルテール・ユウゴオの云へるとほりに、われらはすべて死刑の宣告を受けて居るのであるが、然しその執行猶豫の期間は、不定だけが差異である。われらは死に至るまでに或合ひ間を持つて居る。その合ひ間がなくなると、われらの場所には、われらは最早居ないのである。

或人々は、この合間を懶惰に送り、或人々は、高度の激情のうちに暮らすのであるが、少くとも『この世の子供』のうちで、最も賢明なる人は、藝術と歌とのうちに暮らすのである。何となれば、われらの唯一の機會は、この合ひ間を擴大し、與へられたる時のうちに出來得るだけ多くの脈膊を入れることに在る。偉大なる激情が、われらに與ふるものは、時のこの急速な感じと、戀愛の歡喜と悲哀、熱心なる活動——それが無關心であつても、なくとも——の種々の形であつて、かゝる形は、自然的にわれらの多くのものに来るのである。それは激情であるといふ事、即ちそのものが、速度を早められ、又複雑化された意識のこの果實を、われらに與へる所以のものである事だけは、確實である。詩的激情、美に對する渴望、藝術を藝術そのものゝために愛する心——これらは、かゝる智識を最も多く有する。何となれば、藝術は、われらの瞬間が通り行くとき、その瞬間に最高の性質のみを與へ、しかもたゞ瞬間そのものゝためにのみ、これを與ふることを、公然と聲明して到來するからである。

——千八百六十四年——

(註) この短い『結論』は、この著の第二版に於ては、省略された。それは、この書を手にした青年の或ものが、この結論によつてあらぬ方へ誤導されはしまいかと、考へたからであつた。しかし、私は大局から見ても、この結論に僅少の變更を施して、こゝに再び印刷することを最上だと考へた。この變更は、本結論を私の原意に、より密接に近づける。私は、こゝに暗示せられたる諸思想を、拙著『快樂論者マールヌス』(Marius the Epicurean)に於て、もつと十分に取扱つた。——原作者

ルネサンス終

結 論

大正十年十一月十五日印刷
大正十年十二月十三日發行

豫約

著作者 神田 豐 穂

發行者 神田 豐 穂
東京市神田區表神保町一〇番地

印刷者 谷口 熊之助
東京牛込區早稻田鶴巻町三六二

印刷所 早稻田印刷株式會社
東京牛込區早稻田鶴巻町三六二
電話番町一四八一番

東京市神田區表神保町十番地

株式會社 杜翁全集刊行會
春秋社內

電話東京二四八六一番
電話神田二一三八

篇アタエベ・アタルオウ
スンサネル

發行所

902

P27b

終

